



ひえい ひとし
日栄 仁さん(40歳) 愛西市藤ヶ瀬

家族と一緒においしいイチゴを届けたい

38アールのハウスで両親とイチゴを栽培する日栄仁さんは就農して22年目。家族との時間を第一にこれまで農業を続けてきました。

イチゴは11月から翌年5月までの約半年間、出荷作業が行われます。本来暖かい春が旬のイチゴですが、ハウスを用いて気温を整えることで冬場からの収穫ができ、需要の最盛期であるクリスマスシーズンの出荷を可能にしています。春が近づくと、さらに実る量は増えていき、すべてを取りきることはできません。5月以降も収穫はできますが、来年度に向けた準備やスケジュールを考へて、決められた期間でできる限り多くのイチゴを出荷することを目標にしています。「出荷の時期は、一日休みをとれるのが半年の内1、2日程度。イチゴが次々とできるため、休みはほとんどありません。その分、収穫以外の時期は家族との時間を作っていきたいです」と話す日栄さん。忙しいときには三歳になる息子がイチゴを食べて喜ぶ姿を励みに作業を行います。繁忙期が終わった後も次年度の収穫に向けてハウスの整備や苗の準備が控えています。またまとまった時間を作るために、できる作業は素早く終わらせます。

現在は両親のもとで学びながら栽培を続けている日栄さん。あまイチゴ組合の出荷する「ゆめのか」は、就農して数年後に管内で導入が始まった品種で

す。はじめは手探りの部分も多かったですが、両親の経験をもとに生育の速度や適切な栽培環境などの情報を積み上げていき、収量が向上しました。作業やスケジュールについて気軽に相談できるのは家族経営の強みの一つです。長年イチゴの生育や栽培について学んできましたが、将来的には両親から経営を引き継ぐことになる予定です。「今後は人手の確保や全体の収支、地域とのやり取りなど、農場運営全体についても意識を向けていくことになりました。責任や考えることは増えていきますが、これからも家族と一緒に、おいしいイチゴを届けていきたいです」とメッセージをいただきました。

